『経済表』とマルクス

坂田太郎

I

フランスワ・ケネーの『経済表』はいうまでもなく，重農主義の経済理論を簡単な図形に総括的に表現したものであり，社会的総資本の再生産過程を流通過程を介して示そうとしたものであるが，マルクスの把握は表をもって，したがってまた重農主義の理論的立場をもって，商品資本循環の方式 (W′-G′-W-P-W′) を基礎とするものと解する点に特徴をもつ。

マルクスのこうした把握は，重商主義に対する重農主義の対決の基礎を明かにしようとする動機と深く結びついている。すなわち彼によると重商主義の立場は，商業資本の運動形式 G-W-G′ をその理論的出発点とする。この立場にしたがうと資本流通は，ただ2つの流通段階 G-W および W-G′ から成るところの循環である。それは生産過程によって媒介されない単純な貨幣流通の形態をあらわす。ということはこの立場が，利潤の源泉，および富一般の源泉を，専ら流通面において見ていたこと，すなわち「当事者間での富の譲渡または振動にもとづく利潤」[1] を唯一の剰余価値と見ていたことを意味することになる。

これに対置される重農主義の立場を特徴づけるのは，商品資本循環の方式である。この立場は先ず与えられた商品としての資本の分析から出発するが，この方式において特徴的な点は，「増殖された資本が，総商品生産物のすがたで出発点を形づくり，みずから運動する資本・商品資本の形式をとる」[2] ことである。なぜというにこの方式は，W′-W′ なる循環がそのコースの内部で他の資本を前提とせざるをえないがために，循環そのものを一般的な循環形態即ち個別資本に共通な運動形態として考察することを求めるばかりでなく，個別資本の総和即ち社会的総資本の運動形態として考察することを要求するし，したがって後者の意味においては，当初の W′ は与えられた総商品生産物のすがたで出発点を形づくることになるからである。この総商品生産物の形をとる資本が，いかに流通過程における転形を経つつそれ自らを再生産し，剰余生産物を創出するかが分析の対象となるが，さらにこの立場は，剰余価値創出の場を流通の部面から直接的生産そのものの部面に移す点で，重商主義のそれとは対蹠的である。しかしこの立場はその反面において，同じく反重商主義の態度を持して生産の部面を重視しながら，ともすると重商主義以前に逆行するおそれさえもつところの立場，すなわちケネーの時代にありふれたところの・貨幣を賤視し，いたずらに富の財物観に囚われていた重農論者たちの・見解からも，鋭く区別されなくてはならない。

商品資本循環の方式は，流通の意義に力点をおく。資本の再生産過程を流通過程との相即において把握しようとする。流通を重視するとは，それが単に資本の転形を媒介するという点を指摘するばかりでなく，進んでそれが個別経済を統一的な国民経済に結びつける連続的過程としての意義をもつことを重く視るのである。

じじつ『経済表』においては，前期間における純生産物 (produit net) 即ち剰余価値を含む総商品生産物が，当期間においていかに貨幣に転形して収入を形づくり，生産資本の形成に導くかが表示され，一方では個人的消費基本への，他方では再生産基本への社会的総生産物の配分と，貨幣流通を介しての再生産過程の結実とが，構造的に描かれるのである。マルクスが『経済表』のこの試みをきわめて高く評価したことはよく知られているが，彼の把握は，『経済表』が果して商品流通の姿を示したものか，または貨幣流通の秩序を描

---

1) Marx, *Theorien über den Mehrwert*, Institut für Marxismus-Leninismus, 1. Teil, Berlin, 1956, S. 32.

2) Marx, *Das Kapital*, besorgt von Marx-Engels-Lenin Iustitut, Buch II, 1933, S. 89.

いたものかという蒸し返されてきた原理的な問題に鋭い見透しを与えたものであり，したがって重農主義の理論的立場に深い洞察を加えたものなのであって，彼の解釈の長所とされている点は，まさにここにあるといわなくてはならない。

ところでマルクスの『経済表』研究は，1767年《*Physiocratie*》に再録された「経済表の分析」(Analyse du tableau économique)を手がかりとするものであり，したがって範式(formule)のみを対象とするものである[3]。もっとも彼が他の重農主義者の著作を通じて，間接に原表(zigzag)の存在を知っていたことは充分推測しうるのであるが，われわれのここでの問題は，マルクスが範式そのものをどうとりあつかったかということである。このことは，『経済表』(とくに範式)解釈史の上でゆるがせにできないテーマを形づくるばかりでなく，上に触れたマルクスの卓越した原理的把握が，範式そのものの解釈とどうつながっているかを見定めるためにも重要である。彼のとりあつかいにすぐれた面のあることは言うまでもないが，しかしわれわれに首尾一貫しない混雑した印象を与えたりする面もある。このことはひとつには，ケネーやその弟子たちの説明の晦渋さ・曖昧さから来ていることと思うし，また他面には，この問題に触れた彼の論稿が『反デューリング論』所収のものを除いては，完成した形で残されず，従来カウツキーによって整理され，著しく改稿された形(『剰余価値学説史』)[4]でしかわれわれに知られなかったいきさつにもよることと考えられている。ところが1昨年この部分がマルクスの草稿に近い形で刊行されたことは，われわれにあらためてこの点を検討する機会を与えてくれたことになる。

マルクスが直接範式をとりあつかった論稿は3つある。その1つは1861—63年の尨大な手稿(ノート23冊からなる)のうちの第10冊422—37頁を占めるところの「ケネーによる経済表」(Tableau économique nach Quesnay)という標題をもつ「岐論」(Abschweifung)であり，その殆んど全部は1862年4月彼がマンチェスター滞在中に書かれたものと言われる[5]。この部分は，1昨年研究所版として公刊されたドイツ文『剰余価値学説史』第1部の第6章としてその中に収められている(これを仮りに草稿Aと呼ぶことにする)。もう1つの草稿は，同じ手稿の第23冊1433—34頁を占める小篇であり，編集者によって「重農主義者に関する章の補足」(Ergänzung zum Kapitel über Physiokraten)という標題を付し，同書に「補遺8」として挿入されているものである(これを草稿Bと呼ぶ)。最後のものが1878年刊のエンゲルスの『反デューリング論』(*Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft*)の中に挿入されているその第2篇第10章「批判史より」(Aus der《Kritischer Geschichte》)であることはいうまでもない。ところでこれら3つの論稿に示されているマルクスのとりあつかいを検討する前に，一応ケネー自身がその「分析」で範式をどう説明したかを見ておきたい。

II

範式が社会的総資本の単純再生産のプロセスを描く狙いをもち，それを媒介するところの地主階級，借地農業者の階級(生産階級)および商工業者の階級(不姓・不生産階級)の間の流通を総括的に示したものであることはいうまでもないが，その構成を見ると(Figure 1を見よ)，表の最上段には

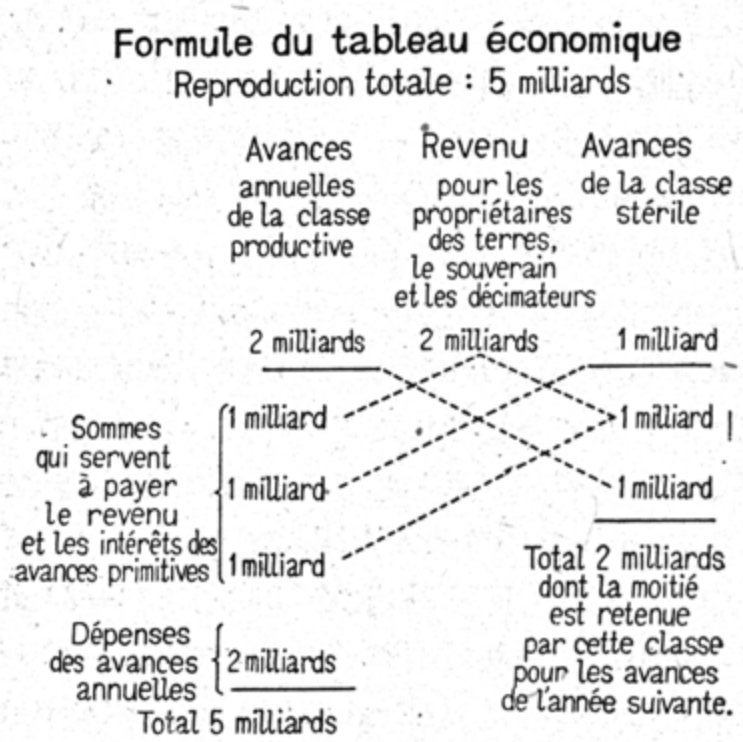
3) 『経済表』の原表は，その初版から3版に至るまで早くから坊間に伝わらず，初版の手稿と第2版の校正刷とが発見されたのが1889年，後者が写真版として再刷されたのが1894年，いずれもマルクスの死後のことである。この再刷前にあっては，原表は主としてミラボの著書を通じて知られていた。なおマルクスはケネーおよびその他の重農主義者たちの著作を，主としてデールの編集した2巻本を通して利用した。「経済表の分析」の場合も同様である。(*Physiocrates*, avec une introduction sur la doctrine des Physiocrates, des commentaires et des notices historiques par Eugène Daire, 2 parties, Paris, 1848.)ちなみにデールのこの2巻本は，ケネーの弟子デュポン・ド・ヌムルがケネーおよびその弟子たちの主要著作を集めて刊行した《*Physiocratie*》(1767)のイヴェルドン版に準拠して編集されたものらしい。

4) *Theorien über den Mehrwert*, aus dem nachgelassenen Manuskript《*Zur Kritik der politischen Ökonomie*》von Karl Kautzky, 1. Bd., Stuttgart, 1904.

5) Marx, *Theorien*, S. 461, Anm. 88.

前年度の総再生産額五十億リーヴルという数字が挙げてある。そしてその下は階級別に左・中・右の3欄に分割されているが，左欄の上部に，「分析」の説明によると，本年度の収穫を挙げるために前年度に支出された生産階級の年前払(avance

Figure 1



annuelle)即ち経営資本20億リーヴルが示されている。そしてその下に，この額を生産階級が当年度において受けとる貨幣額から区別する横線がある。ところでこの年前払をもって前年度に20億の純生産物を含む50億の総再生産額が挙げられたのであり，それはそのまま生産階級の手に保有されているが，前年度の終りにはさらに，貨幣20億がこの階級の手に還流する。そしてこの階級がそれを地代として地主階級に納付することをもって1年度が終了するのである。(生産階級はこの年前払の他に，その5倍に相当する100億の原前払(avance primitive)即ち設備資本を投下するが，利子と呼ばれるこの前払の年償却額(intérêt de l' avance primitive)が，1割即ち10億であることが前提されている。)したがって当年度のはじめには，生産階級の手に50億の生産物があり，地主階級の手には20億の貨幣があるわけであって，この貨幣が地主階級の収入(revenu)として中欄の上部に掲げてあることは表の示す通りである。ところが右欄の上部にある不生産階級の前払10億については，別に前年度のものという規定がなく，したがって当然当年度の当初この階級の手にあるものと考えなくてはならないが，そればかりでなく，生産階級の前払とは違って，それが貨幣額をあらわす点に注意しなくてはならない。(原表から『農業哲学綱要』*Elémens de la philosophie rurale*, 1767.)の略式(formule abrégée)に至るまでは，この前払も商品として，加工品としてとりあつかわれてきた。)

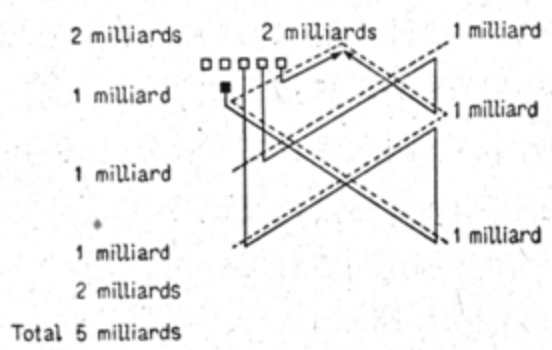
さて当年度は，(i)地主階級が収得した貨幣収入を切半して，生産階級からは食糧品等として生産物の1単位10億分を，不生産階級からは加工品の1単位10億分を購入し，この支出によって流通が開始する。かくして生産階級の保有する生産物の最初の単位10億分は地主階級の手に渡り，そこで最終的に消費され，この階級の支出する貨幣10億が生産階級の手に還流する。しかるに不生産階級からの購入の場合は，略式の場合のように，この階級の手にある年前払の補塡分としての加工品が，商品として地主階級の手に渡るという形をとらない。不生産階級の年前払はここでは，財貨でなく貨幣である。したがって(ii)この不生産階級の年前払たる貨幣10億が原料品の購入のために生産階級に支出され，その結果後者から原料品としてその生産物の第2の単位10億分が不生産階級の手に移る。かくて(iii)不生産階級と地主階級との間の取引の目的物となるのは，不生産階級の手に入るこの原料品の加工態ということにならざるを得ない。「分析」の説明によると，不生産階級は期間の始めに当って，貨幣形態をとる前払以外に何ものをも所有しないらしいからである。

この結果不生産階級の手には地主階級から受けとった貨幣10億があることになるが，(iv)それは不生産階級の作業者の生活のために，生産階級から食糧品等としてその生産物の第3の単位10億分を購入するのに使われる。このようにして生産階級の手にあった前年度の総再生産額50億は，この階級の前払として現物のまま消費される2単位20億分を除き，そのことごとくが他の階級の手に移ってしまう。以上の取引の結果，生産階級は30億の貨幣を取得することになるが，(v)その中10億は，不生産階級からの加工品の購入に充てられる。この加工品は財貨的には，不生産階級が生産

階級から購入したその生産物の第3の単位の転形と見らるべきであるが，それが生産階級において，原前払の利子としてその償却に充てられることになる。生産階級の手にある残りの貨幣20億が，地主階級の収入をなすところの地代の支払に充てられることはいうまでもない。そして不生産階級の手に渡る貨幣10億は，原料品の購入のために翌年再び生産階級に対して使用されるその前払の回収分として，その手に保存されるのである。ここに1期間の末に不生産階級の手に残るものが財貨でなく，貨幣であることが明瞭である。ところで生産階級の側において，その手許にある20億の年前払をもって，50億の再生産額が挙げられるいきさつは繰り返すまでもない。この再生産額の確保と地主に対する地代の支払とをもって，当生産期間は終了するのである。

Figure 2 は，「分析」の説明にしたがって範式における流通の秩序を描いたものである。(点線は

Figure 2



貨幣の流れを，実線はそれと相関的に財貨の流れを示す。) この図は範式の形そのままではない。じじつ「分析」におけるケネーの説明にしたがって流通の秩序を描くとすれば，範式の形そのままとはならないのが当然なのである。略式の場合と同じく範式においても，生産階級の年前払と不生産階級のそれとが対照的な地位に置かれ，地主の手による収入の等分支出とともに，両階級の資本補塡が均斉的にあらわされているような外観を呈する。しかし範式は略式の形式だけをそのまま受けついでいるのであって，そこには両階級の資本補塡を対照的に・相関的に考える構想は存しないことに注意を要する。それゆえ略式の形式だけを借りることは，この場合無意味である 。

のみならず範式にはまた，略式と共通したいくつかの難点がからんでいる。その第1は，範式における生産階級の年前払が元来現物のまま消費されるものであること，したがってその支出は現物支出であって，範式の示すような貨幣支出ではありえないこと。(範式は階級間流通のみを描き，斜線は2つの階級の間の取引を示すのであるが，この年前払は全く階級間に流通することがないのである。) 第2にこの階級の年前払は，前年度の支出とされていること。しかるにこの表の斜線はそのすべてが当年度における流通を示す筈のものであるから，前年度の前払からの斜線は無意味であることになる。第3に範式は，この階級の年前払からの斜線をもって，原前払の償却のための不生産階級からの加工品の購入をあらわそうとしているが，そうすることによって年前払の支出の内容を，原前払償却のための貨幣支出とすり替えていること，がこれである。このようにして不生産階級の年前払からの斜線は，それが貨幣支出であり，それ自身を補塡するための生産階級からの原料品の購入を示すものであるから充分意味があるが，これと対照的に示されている生産階級の年前払からの斜線は，どう考えてもわれわれを納得させるものではないのである。

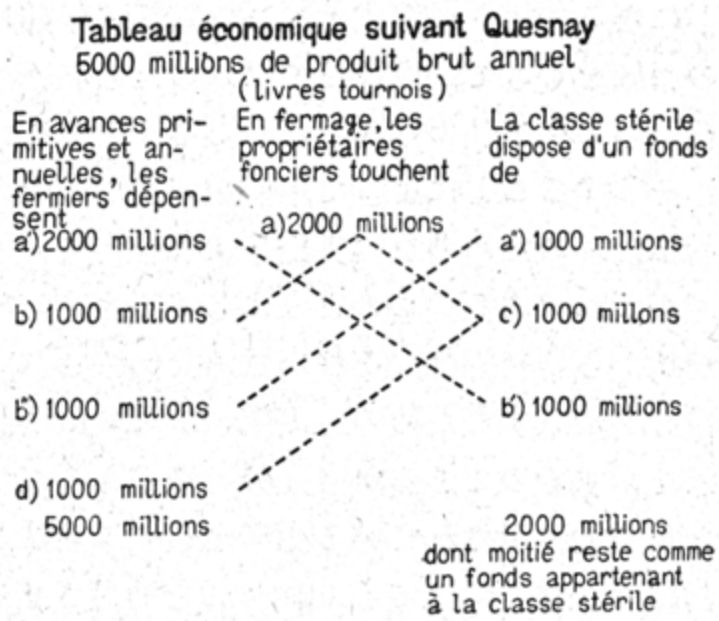
つぎに注意を要するのは，範式に至って流通する貨幣量が30億となること，つまり収入の1倍半の額となることである。すなわち1期間の終りに生産階級は20億の貨幣を回収し，それを地主に支払う。これに対して不生産階級の側には，10億の貨幣が年前払の回収分として保存される。併せて30億である。もともと重農主義の建前からいうと，1国の貨幣保有量は純生産物のヴォリュームに相応すべきものとされる。流通速度がこの量を加減することは当然のいきさつとして認められているが，このような構想から，原表以来貨幣量は収入すなわち純生産物と等量とされてきた。しかるに範式に至ってこの点に大きな変化があったわけである。以上が「分析」の説明にしたがって描いた範式の構想である[6]。これをマルクスがどう受けとり，どう解釈しているかがつぎの問題である。

6) 抽訳，ケネー『経済表』，解説，70—76頁参照。

III

この問題に立ち入るに先立って先ず触れておきたいのは，マルクスがその草稿で示している範式が必ずしも「分析」のそれではない点である。(この点は『学説史』の研究所版の公刊によってはじめてわれわれに知られた。)彼は草稿AとBとに範式を掲げている。ところが草稿Aの範式(Figure 3)はシュマルツの著書(Schmalz, *Economie politique*, ouvrage traduit de l'allemand par Heuri Gouffroy, tome 1, Paris, 1826, p. 329.)に挙げて

Figure 3



ある表を利用したものといわれる[7]。草稿Bに掲げてあるものは「分析」の範式を簡単にしたものであって，金額と斜線と左右両欄の下の合計額の他は，ただ各欄の見出しとして最上部に Productives, Propriétaires, Stériles を置いたにすぎないものである。

そこで草稿Aの表と「分析」の範式とを比較してすぐ気づくのは，範式における生産階級の年前払が「原前払及び年前払」と訂正されている点である。じじつ『農業哲学』(Philosophie rurale, 1763.)以後の著作になると，ケネーやミラボの説明のうちにしばしば，原前払の利子だけでなくそれと年前払の利子とをひとまとめにしてとりあつかっている個所があるのであるが，マルクスがシュマルツの訂正をそのまま受けいれているのは，彼が意識していたと否とにかかわらず，結果としては上に述べた第3の難点を，したがってまた第1の難点をも，緩和することになっている点を注意したい。のみならずマルクスはこの前払の支出を前年度のものとすることなく，当然当年度のものとしてとりあつかうことによって，第2の難点をも解消させる。かくてこの支出はこう説明されるのである。「(この支出をもって)借地農業者は彼の年前払および原前払——それらが一部は道具等から，また他の一部は生産の途中に彼が消費するところの加工品から成るかぎり——を補填するために，不生産階級から10億分(の加工品)を購入するのである。」[8]もっともこのような処理を行っても，年前払が流動資本としての現物支出を意味するかぎり，年前払の利子(償却分)という観念は必ずしも明確とはならないし，それに計算の上からも問題をはらんでいる。というのは，10億の利子は利子1割とすると，結局100億の原前払の利子を含むだけとなって，年前払のそれを包含する根拠をもたないからである。

しかるにこのようなとりあつかいは，また別の意味から範式の大きな欠陥を緩和することになりうる。というのは原表においては，生産階級の年前払が商品資本から貨幣形態に転形し，さらにそれが階級内から購入される農産物と不生産階級から購入される加工品とに支出されて，生産資本を形成する構想が展開されていた。ところが『農業哲学』の略表(tableau abrégé)以後になると，この階級の年前払は現物のまま何ら転形を経ることなくして充用されることになり，したがってその組成部分として全く加工品を包含しなくなる。マルクスは範式における年前払の現物支出を一応認めながら，やはりそれが何ら加工品を含まないことに不自然さを感じ，年前払の利子という観念を使って，その欠陥をいくらかでも除去しようとしたのではないかと見て見られなくはない。そう見ることは多分に思いすごしの嫌いがあるが，しかしマルクスが能う限り範式の構想を合理化しようとする意図をもっていたことは，いろいろの点から推察に難くないのである。

さらにマルクスは不生産階級の年前払を，おそらく略式以前の説明を汲んで，これを加工品と解

7) Marx, *op. cit.* ただしFigure 3に見られるa, b等の記号はマルクスの附したものである。

8) Marx, *op. cit.*, S. 294.

した。このことは先ず，『経済表』を商品資本の循環方式と解する基本的見地から当然の措置といわなくてはならない。すなわち，増殖された資本が総商品生産物の姿で出発点を形づくるところに『経済表』の最も特徴的な点があるとするのであるから，この出発点における年前払は原表以来の構想を尊重して，これを商品としてつかむのが当然である。同時にこのことは，マルクスが貨幣の流通量を30億とする範式の説明を大きく修正して，原表以来の構想に戻し，20億としたこととも関連する。なぜならこの措置は，不生産階級の年前払が当初貨幣でなく財貨であるとすることと結びつくからである。このようにして貨幣の流通量は純生産物と等量とされることになるが，さらに重要なことは，かようなとりあつかいによって，生産の起点たる生産階級への貨幣の還流が完了しうることとなる点である。範式そのままでは，還流は完結しないのである。

これらの点とならべて問題とすべきは，マルクスがケネーの重農主義的純計を訂正している点であろう。ケネーの範式の前提は，新しい期間の開始に当って，生産階級たる借地農業者が彼の「総生産物」(produit brut) 50億の他に，20億の貨幣を所有することである。ところがケネーは忘れているのだが，とマルクスは言う，農業者の手にある50億の総生産物の他に，不生産階級たる商工業者の手に20億の加工品がある。というのは，50億は借地農業者のもたらした年生産物の合計を表わすだけであって，決して工業の生産物を表わしてはいないからである。従って期首においては，(i)借地農業者の手に20億の貨幣，(ii)おなじくその手に50億の総生産物，(iii)商工業者の手に20億の加工品，が存在しなくてはならない。つまり20億の貨幣と70億の生産物である[9]。

たしかに重農主義の建前からすると，工業の生産物は単に農業生産物の転形に他ならず，工業労働はただ原料品の価格に工業労働の賃銀即ち生活資料の価格を附加するにとどまるのであるから，総生産額の純計においては，この見地から加工品の額が除外される。しかしながら流通の秩序の開始に当っては，少くとも不生産階級の手に年前払の補塡分としての加工品の存在が前提されざるをえないのであって，ケネーも『農業哲学』においてそのいきさつを認め，加工品の1単位を総生産額のうちにではなく，富の総額のうちに加算することによって，暗に原表以来の窮屈な純計が誤解を与えることを防ごうとしたもののようである[10]。しかしマルクスは，単に流通の開始に当っての支障を除くため，年度の始めに不生産階級の手に1単位の加工品の存在を前提するのではなく，2単位のそれを仮定する。たしかに1期間中の加工品の生産が2単位20億分であることは，範式右欄下段の合計額からも明瞭である。しかし期首において不生産階級の手に2単位の加工品が現存する(vorhanden)とするのは[11]，不生産階級の年前払を1単位10億とするかぎり，資本循環の出発点を期首における総生産額の形でとらえる基本的見地から見て，この前払額とそぐわない問題点を残すおそれがありはしないかと思われる。シュテファン・バウエルはしたがって，1単位の存在をしか認めていない[12]。が，マルクスも後の『反デューリング論』では，いささかこの点の表現に手心を加えているように見えるのである(後文参照)。それはともかく，ここで一応マルクスの描いた流通の秩序を辿って見ることとしよう。

先ず出発点において，借地農業者の階級の手に50億の生産物と商工業者の階級に20億の加工品があり，さらに借地農業者の階級が前期間に回収した貨幣20億を所有することが前提となる。そして(i)借地農業者の階級が，この貨幣を地代として地主階級に支払うことをもって流通が開始する。ゆえにマルクスにおいては，地代の支払は期

9) ibid., SS. 295—6.

10) (Mirabeau), *Philosophie Rurale*, Amsterdam, 1764, tome 1, pp. 123, 327.

11) Marx, *op. cit.*, S. 295.

12) Stephan Bauer, "Quesnay's Tableau Economique", *Economic Journal*, Vol. V, pp. 16—8.

13) マルクスはしばしばボードを引用し，またそれに依拠しているが，ボードは貨幣流通の考察を地主階級に対する生産階級の地代の支払からはじめるのである。L' abbé Nicolas Baudeau, "Explication du Tableau économique à Madame de***", *Physiocrates*, éd. par Eugène Daire, 2e partie, pp. 857—8.

間の終りではなくて始めである。これはボードの解釈にしたがったものと見ることができるが[13]，このこともマルクスの解釈としては，少なからぬ意味を含めたもののように思われる。なぜならここでは，流通の起首が地主階級の手による収入の支出にあるという意義が，したがってまた地主階級そのものの経済的機能の意義が解釈されて，生産階級たる借地農業者が生産の起点であると同時に流通の起点であるという印象が，鮮明とならざるをえないからである[14]。

ところで (ii) 地主階級はこの収得した貨幣を切半し，借地農業者の階級から 10 億分の食糧を購入する (b—a)。そしてそれと引きかえに，後者の手に 10 億の貨幣が還流するのである (a—b)。これによってこの階級の手にある総生産額の第 1 の 1/5 が処分され，流通から出て最終的に消費される。さらに (iii) 地主階級は，10 億の貨幣で商工業者の階級から 10 億の加工品を買う (c—a)。かくして後者の手にある 20 億の加工品のうち 1/2 が最終的に消費され，その対価としての 10 億の貨幣が商工業者の階級の手に渡る (a—c)。ところで (iv) この階級はこれで 10 億分の食糧を借地農業者の階級から購入する (d—c)。このため生産階級が地代として地主階級に支払った第 2 の貨幣 10 億もその手に還流する (c—d) ことになるが，他面この階級の総生産額の第 2 の 1/5 が流通から消費に入る。(v) 借地農業者の階級は，その手にある 20 億の貨幣のうち 10 億をもって，彼の年前払および原前払を補填するために，不生産階級から 10 億分の加工品を購入する (b′—a′)。ここで 10 億の貨幣が商工業者の階級の手に渡り (a′—b′)，この階級の手にあった加工品の第 2 の 1/2 が，生産階級によって生産的に消費されることになる。この過程の説明に問題のあることは，上に指摘した通りである。最後に (vi) 商工業者の階級が，10 億の貨幣を原料等の購入に使用する (b″—a″)。したがって借地農業者の階級の手にある総生産額の第 3 の 1/5 が，不生産階級の年前払を補填する形で消費され，10 億の貨幣は再び生産階級の手に戻ることとなる (a″—b″)。かくて貨幣の還流が完了する。

ここでマルクスは借地農業者の階級の手にある総生産額の処理に言及して，その 1/5 は地主が消費し，2/5 は不生産階級の手に渡り，残る 1/5 が流通することなく，現物のまま生産階級の再生産に入りこむ，したがってこれらの合計は 4/5 になる，と書いている[15]。それならば残る 1/5 はどうなるのであろうか。マルクスはつづけて言う。「ここであきらかに計算が中絶しているのである。ケネーはこう計算するらしい。食糧での 10 億 (1/5) を F (借地農業者) が P (地主) に与える (a—b)。10 億の原料をもって彼 (F) は S (商工業者) の基本を補填する (a″—b″)。それから 10 億の食糧は S の賃銀を形づくるが (c—d)，それを彼 (S) は商品の価値に附加し，この附加中に食糧として消費する。そして 10 億は再生産のために残り (a′)，流通に入りこまない。最後に 10 億の生産物が前払を補填するのである (a′—b′)。ただケネーは，S がこの 10 億の加工品をもって借地農業者から食糧も原料も買うのでなく，彼に彼自身の貨幣を払い戻すのだということを見落しているのである[16]。」

このマルクスの説明のうち最後のくだりは，その意味がはっきりしないし，ケネーの計算が中絶しているというのも，何を指すのかちょっと分らないが，結局この引用文では，最後に生産階級の「前払を補填する」ところの 10 億の生産物というのは，不生産階級から購入する加工品のことであるらしい。したがって総生産額の最後の残り 1/5 は，依然として不明のままである。この点に関する別の個所の説明も表現が甚だ曖昧であるが，同じ趣旨のものと思われる。いわく，「さらに前払の 1/5 は再生産に属する (Ferner 1/5 der avances gehört der Reproduktion)。だから食糧の 1/5 が自由に処理できるのであって，それは全く流通に入らない。」[17] ここでも触れられているのは総生産額中の 4/5 であって，最後の 1/5 の行方は明か

14) 草稿 B では貨幣流通は地主階級からはじまるということが，はっきりうち出されている。Marx, *op. cit.*, S. 342. 草稿 A と B との間には，少くとも表現の上でのいくらかの差異が認められる。

15) Marx, *op. cit.*, S. 295.

16) *ibid.*

17) *ibid.*, S, 296.

でないのである。ところがマルクスは生産階級の前払の補塡分が，その半分は現物のまま流通過程に入らない総生産額の 1/5 であり，さらに他の半分は，不生産階級から購入する加工品であることを言う[18]。もちろん上に見たように，マルクスはこの前払部分を年前払及び原前払の両者を含めたものと解しているのであるが，いずれにしろここには，範式の秩序よりも寧ろ原表における流通の秩序を読みとろうとした意図が感じられはしないかと思うのである。しかし範式の前提に基いて(彼はそれを部分的に修正しているが)原表の構想を読みとることは，無理を生む。マルクスでは結局そのことが，宙に迷った総生産額の最後の 1/5 に象徴されて現われているということができる。

マルクスは草稿Bでも，同じ問題をとりあげる。すなわち(iv)までの流通の過程を述べた後，「だから残りは農業生産物の 2/5 である。1/5 は現物で消費されるが，第 2 の 1/5 はいったいどこに蓄積されるのか，このことは後に触れる」[19] といっていながら，草稿では結局触れずじまいになるのである。恐らく草稿(特に A)におけるマルクスの説明の曖昧さは，I に触れたいくつかの理由は別として，その大半が，『学説史』研究所版の編集者の推測する如く，「岐論」を書きおろした際彼の手もとにケネーやその他の著者たちの文献がなかったことに帰せられるのかも知れない[20]。それならばこれらの点は，1878年の『反デューリング論』第 2 篇第 10 章では，どうなっているであろうか。

ここではマルクスはケネーの前提を修正しながらも，草稿 A・B に比べるとかなり「分析」の叙述に接近を示している。問題の総生産額の残り 2/5 即ち 20 億分については，彼はそれがそのまま一般的流通に入りこまずに経費資本(Betriebskapital)即ち年前払の補塡に充てられると言う[21]。それならば不生産階級から購入する加工品はどうなのか。それは生産階級における設備資本(Anlagekapital)即ち原前払の利子の転化形態(verwandelte Form)だと指摘する[22]。さらにこの「10 億の基本」即ち農業生産額のうち利子に充てられるものの大部分は，年間に必要となる設備資本の修理やその一部の更新とか，災害の予備金とか，また可能ならば土地の改良や耕作の拡張のような設備資本・経営資本の追加に充てられるものとする[23]。したがってそれが大体において，ケネーのいう原前払の利子に当ることは明白である。

しかし原前払の利子の転化形態とは何を指すのであろうか。これについては，(iv)までの流通の過程を述べた後で言う。「上に見たごとく，過程のはじめに生産階級の手に 30 億の剰余(Überschuss)があった。そのうち総生産物としての 20 億だけが地代の形で地主階級に支払われた。剰余のうち残りの 10 億が，借地農業者の階級の設備資本の利子即ち100億に対する1割のものを形づくる。彼らはこの利子を——充分注意すべきことだが——流通から得るのではない。それは現物のまま彼らの手にあるのであって，彼らはそれをただ流通によって実現するだけである。すなわち流通を媒介として，それを同じ価値の加工品に替えるのである。」[24] ところが過程のはじめにある剰余とは，とりも直さず生産階級が 50 億の総生産額(Bruttoprodukt)のうち，20 億の経営資本の現物による補塡を済ませた後になお保有する 30 億の生産物のことであるらしい[25]。したがってマルクスがこの剰余の中から純生産物(Nettoprodukt)としての 20 億が地代の形で支払われると説明するのは，あきらかに貨幣と財貨との混同であるといわなければならないように見える。

マルクスにしてなおかつこのような混同をすることは不思議に思われようが，それはともかくここでわれわれに重要なのはそれにつづく説明である。そもそも『反デューリング論』では，『学説史』とは違って，不生産階級の年前払(経営資本)が 10 億の価値の原料のみから成ることがはっきりと規定されている。この原料は前年度からもち越され

18) *ibid.*
19) *ibid.*, S. 343.
20) *ibid.*, S. 461, Anm. 88.
21) F. Engels, *Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft*, Bücherei des Marxismus-Leninismus, Berlin, 1953, S. 303.
22) *ibid.*, S. 309.
23) *ibid.*, S. 308.
24) *ibid.*
25) *ibid.*, S. 306.

たものである。ただしこれが20億の加工品となるための加工労働に要する生活資料は，当年度において調達されるものと見らるべく，運動の開始当初にあってすでにこの10億の原料が20億の加工品に転化されていること，したがって20億の商品の存在が前提されなくてはならないことが強調される[26]にもかかわらず，当の生活資料は前年度からもち越されるのではないらしいのである。(上に触れた点，即ち年度のはじめに不生産階級の手にある加工品を2単位とする措定が，ここでは緩和されているという事情を思い合されよ。)

それゆえ生産階級の総生産額中，現物のまま年前払の補塡に充てられる20億を除いて，地主階級の手に渡る第1の10億と不生産階級の購入する第2の10億(それは Figure 2 の示すごとくならば，地主階級の手に渡る加工品の財貨的基礎となる)とを仮りに純生産物の財貨的形態とすることができるとすると，第3の10億こそ，一旦不生産階級の手に渡って加工されながら，再び生産階級の手に戻ってその原前払の償却に充てられるものを意味することとなるであろう。原前払の利子の転化形態という説明，すなわち生産階級はこの利子を流通から得るのではない，それは現物のまま彼らの手にあるのであって，彼らはただ流通によってそれを同じ価値の加工品に替えるだけだという説明は，このようにしてはじめて明瞭な内容をもちうるし，またマルクスのいう「剰余」のうちから純生産物が地代として支払われるという説明も，表現は厳密でないが，誤ってはいないことが判明するであろう。

かようにしてマルクスの範式解釈には，いくつかの注目すべき特徴がうち出されている。たしかに説明は3つの論稿を通じてかならずしも首尾一貫していないし，それに始めのもの程，その論述のうちに曖昧さを含んでいる。それにもかかわらずわれわれは，これらの論稿を通じて，ケネーやミラボの説明の不合理な点をできるだけ改め，特に原表の構想を生かそうとしている点，および主として『資本論』第2巻に展開されるところの・『経済表』をもって商品資本循環の方式としてつかむ・つかみ方を貫こうとしている点，を確認することができるのではないかと思うのである。

それにしてもマルクスの範式解釈について一言触れておきたいのは，前掲のボードの業績である。彼の解釈は，内外の『経済表』研究において殆んど顧慮されていないが，ケネーの時代の研究業績としては，それ自身の矛盾と欠陥とを含むにもかかわらず，第1級のものであり，上に挙げたマルクスの解釈のあるものにも影響の跡をうかがうことができる。ところでボードの解釈の特徴の1つは，流通の秩序を3つの段階に分解することである。その第1は生産階級の支払う地代1単位が地主によって不生産階級からの加工品の購入に充てられ，さらに後者がこれを生産階級からの生産物1単位の購入に使用する過程である。この過程には3つの階級がともに関与するところから，彼はこれを完全流通(circulation complète)と呼ぶ。第2の段階は地代の残る1単位が生産階級からの生産物の購入に充てられる場合，第3のそれは生産・不生産階級だけの取引の場合である。このいずれもが3階級にわたるものでないために，それらを不完全流通(circulation incomplète)の名をもって呼ぶのである[27]。マルクスが『反デューリング論』で上述の流通のプロセスのうち，(i)と(ii)とを合せたものを不完全流通，(iii)と(iv)とを合せたものを完全流通，さらに(v)と(vi)とを合せたものを不完全流通と名づけているのは[28]，ボードの例に倣ったものである。

但しマルクスはボードを参看する時も批判的である。例えばボードは不生産階級たる商工業者が結局自己の生産にかかる加工品を消費することのない範式の不合理性を除くため，不等価交換のケースをもちこもうとするが[29]，マルクスは不生産階級が彼らの生産物をその価値以上に売ることによって，商品の一部を彼らのために留保するという説明を受けいれず，かような解釈では，重農主義者が必然的に重商主義すなわち「譲渡利潤」に逆戻りすると述べてこれを戒めているのである[30]。

26) *ibid.*, S. 305.

27) Baudeau, *op. cit.*, pp. 864—6.
28) Engels, *op. cit.*, SS. 306—8.
29) Baudeau, *op. cit.*, p. 861.
30) Marx, *Theorien*, S. 343.